

財団法人松江市教育文化振興事業団

埋蔵文化財課年報Ⅲ

平成 9 年度



田和山遺跡

財団法人松江市教育文化振興事業団

大佐遺跡・藤ヶ谷遺跡

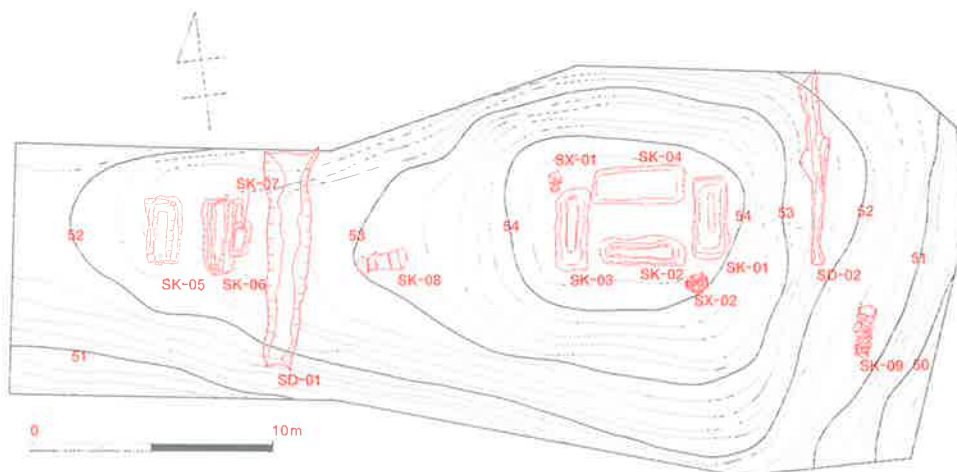
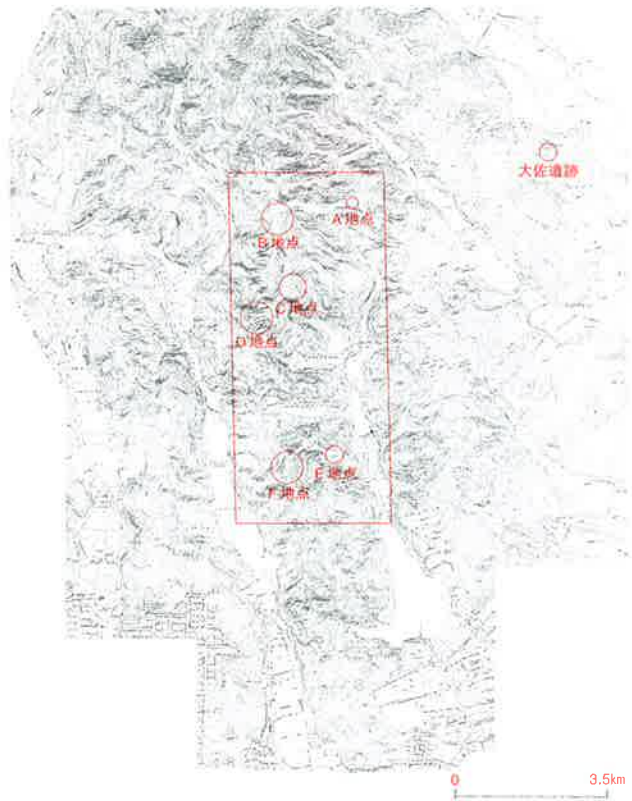
大佐遺跡・藤ヶ谷遺跡は新産業技術センターを中核とするソフトビジネスパークの造成工事に伴って、平成9年4月～平成10年2月まで約10カ月間調査を行った。両遺跡は松江市街地の北方、島根半島から伸びる北山山脈の尾根の南端に位置し、大佐遺跡は西持田町地内の丘陵地にある墳丘墓で、藤ヶ谷遺跡は尾根上の平坦地の点在する城跡推定地で、現在の西川津町・菅田町にまたがる。

1. 大佐遺跡

調査面積約860m²、丘陵頂上部を中心にさまざまな形態の埋葬施設を9基、溝状遺構を2条、埋設された土器を2カ所から検出した。

(1) 丘陵頂上部

丘陵中央を中心に東西南北それぞれに規則正しく配置された埋葬施設（SK-01～04）を検出した。規模などから中心的な埋葬施設は判断できなかった。しかし内部構造は微妙に異なっていた。舟底形もしくは割竹形の木棺を置くために粘土で床をつくっている埋葬施設（SK-01～03）や、赤色顔料を使用していた埋葬施設（SK-01・02）があった。これらの埋葬施設から土器などの副葬品は出土しなかった。



丘陵中心部の南北の両側から埋設された土器棺（北側：S X-01、南側：S X-02）を検出した。S X-01は土壙内で口縁部を南に向け横倒しの状態で、S X-02は2固体で、土壙内で横倒しで打ち欠いた2つの口縁部を枕にして重なるように出土した。

これらの土器は近畿地方の土器の特徴を持つ。土器の中から遺物は出土しなかった。

（S X-02：口縁部が枕？）→



（2）丘陵西側

緩斜面から約50cm～80cm大の4枚の石を蓋石にした石蓋土壙墓（S K-08）を検出した。

楕円形の土壙内から土器などの副葬品は出土しなかったが、加工痕（ノミ痕？）のある約50cm大の石が土壙内南西側の壁際から出土したが、用途については不明である。

さらにその西側からは2段ないし3段掘りの3基の埋葬施設（S K-05～07）を検出した。S K-05・06の南側から石が1個出土したが、用途については不明である。S K-07は小規模な土壙で、S K-06に付随した埋葬施設と考えられる。これらの埋葬施設からも土器などの副葬品は出土しなかった。

またこれらの埋葬施設は丘陵頂上部の埋葬施設とは異なる一群と思われる。

S K-08とS K-05～07を分けるように、間に溝状遺構（S D-01）がある。尾根に直行するように掘られており、丘陵頂上の埋葬施設とこの平坦面の埋葬施設がこの溝によって区切られている。幅は最大で1.4m、深さは最大で0.72mを測る。

このS D-01から遺物は出土しなかった。



SK-06 と 07 ↑

(3) 丘陵東側

丘陵斜面の溝状遺構(SD-02)は、SD-01に比べて規模が小さく、遺物も出土しなかったため、丘陵の埋葬施設に伴うものか、また同時期のものかなど詳細についてはわからない。

斜面を加工した平坦面から箱式石棺(SK-09)を検出した。蓋石は棺直上に6枚、その上に小さな石を置き、合計約20枚程度使用している。側石は北西側3枚、南東側は大きな石3枚と小さな薄手の石1枚の計4枚使用していたが、底石はなかった。規模は内法で長さ1.67m、幅が0.34m~0.16mと細長く、南西側に行くほど狭くなる。枕石と思われる大小3つの石が出土したが、石棺内からは土器などの副葬品は出土しなかった。



組合せ式箱式石棺墓 (SK-09)

(4) まとめ

大佐遺跡は埋設された土器から弥生時代後期~古墳時代前期の墓と考えられる。また尾根に直行する溝によって区画し尾根上の平坦面に複数の埋葬施設をつくるのは、“台状墓”と呼ばれる墓制の一つで弥生時代後期から北近畿地域などでよく見られる墓制である。このような台状墓は周辺を支配したリーダー的存在の家族墓と考えられている。また同じ尾根筋に異なる埋葬施設があるということは、いくつかの別の集団がいた可能性も考えられる。

埋設された土器棺は横倒しではあったが、口を合わせた状態では出土しなかった。その規模から幼児棺と考えられるが、恐らく周辺の木棺墓に埋葬された人と密接な関わりをもつ人ではないかと考えられる。

大佐遺跡は他地域との交流や、弥生時代の墓制を残しつつ古墳時代に移行する過度期の墓制を示す重要な遺跡と思われる。

(石川 崇)

2. 藤ヶ谷遺跡

本遺跡は尾根上に点在する城跡推定地で、松江市の戦国期の代表的な山城である白鹿城・真山城はそれぞれ東側と北側に見る。このような位置的な関係からこれらの城と関連があると考えられる。

尾根筋を歩いてみると全体が城塞群と思わせるほど、地形の表面からその痕跡がうかがえる。例えば尾根や斜面など通路と思われるところには土塁状の低い高まりが見られ、尾根上の平坦面には加工されたようなあとが見られる。本調査では加工されたと思われる所について重点的に発掘を行った。

(1) A地点

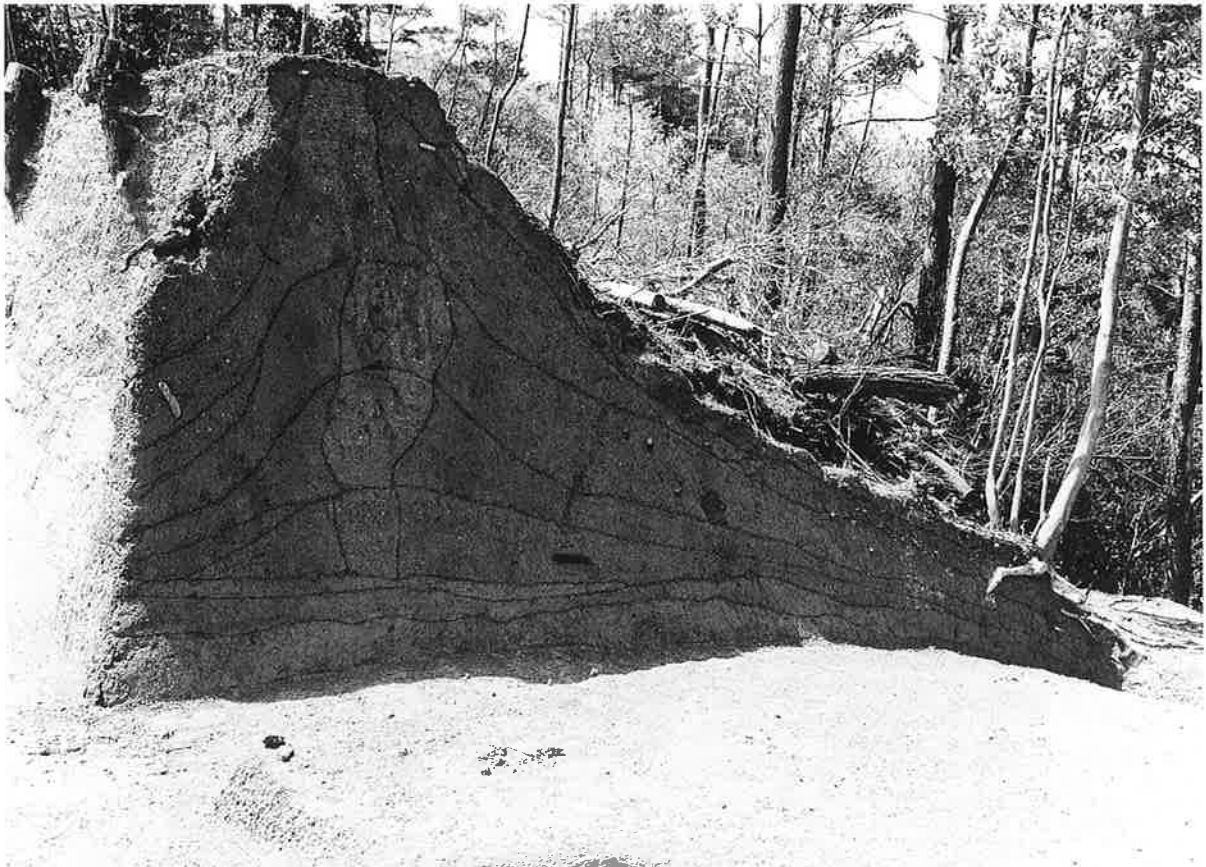
A地点から出土遺物はなく、建物跡などの遺構は検出されなかったが、平坦面を拡張したと思われる痕跡を確認した。恐らく西側の一段高いB地点と関連する曲輪と考えられる。

(2) B地点

B地点は北側の通称“天狗山”に向かう道とA地点に向かう道の分岐点の曲輪である。平坦面の数カ所に土塁状の高まりがあるが、建物跡などの遺構はなく、山城に關係する遺物も出土しなかった。

(3) C地点

C地点は調査前に土橋が確認されており、調査の結果、盛土による築造であることが確認された。この地点が曲輪間をつなぐ重要な機能をもっていたことがうかがえる。また舌状平坦面や土橋の下から焼土壙を検出したが、土橋の築成以前の土壙と思われる。



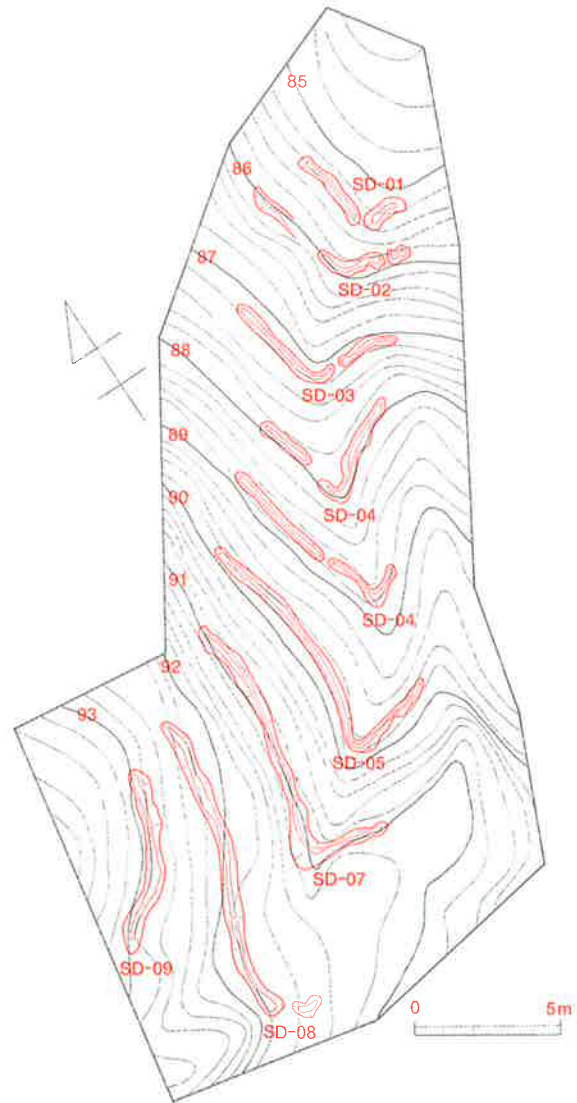
C地点土橋断面：中央は木の根による？攪乱

(4) D地点

D地点の斜面からは9条の溝状遺構を検出した。この溝状遺構は等高線に沿うようにほぼ1 m間隔で掘られている。溝の片側（等高線の低い方）の上端がなく、加工段状になっているところもある。このように所々溝状になっていないところがあるが、深さは最大で50cm前後を測る。この溝は山城の緩斜面の処理方法と考えられる。何のためにどのような機能を果たしたかは不明だが、何か盛土をして階段状に曲輪をつくったかもしれない。

この溝状遺構は通路と思われる緩斜面につくられたもので、通路に関する遺構の可能性が考えられる。

(石川 崇)



D地点溝状遺構：下からSD-03. SD-04

(5) E地点

E地点は、調査以前から表面観察により段曲輪の存在が確認でき、山城の存在は明確であった。最高所は標高81.50mを測り、周辺の丘陵からは突出した高さである。頂部に立つと、荒隈城跡、満願寺城、和久羅城、真山城などの城跡が一望できるほか、宍道湖岸全域や松江市周辺が広く眺望でき、山城としては申し分ない立地といえよう。

発掘調査の結果、E地点は尾根上の平坦面に7つの曲輪が一行に作られている、東西約70mを測る小規模な連郭式山城であることがわかった。

曲輪はI郭が一番広く、これが主郭と考えられる。I郭は曲輪群の中でも最も高い位置にあり、きわめて眺望がよい。I郭を普請するにあたっては、小高い場所がある程度削った跡、地形が低い南側に地山石を大量に混ぜた土を盛り、平坦面を形成したようである。I郭の中央やや西寄りの地点からは、若干の灰と土師質土器の破片が出土した。I郭の周辺には切岸が見られるが、特に南側の切岸はほぼ垂直であり、隣接するVI郭との高低差は約2mを測る。また、境界からは浅くて幅の狭い掘切状の遺構を検出した。

この掘切状遺構は、上端幅0.4m～2m、深さ0.5m前後を測り、一部が土橋状に掘り残されており、通路として利用していたようであるが、この地点で南からの侵入に対して防御しようとした意識があったことは明確である。

I郭の東に位置するVI・VII郭は、いずれも緩斜面でわずかな段差によつて形成されており、明瞭な



空から見たE地点：手前に掘切が見える!!

曲輪ではないが、Ⅶ郭の少し南方に切岸が作られており、敵の侵入路を幅の狭い1カ所に限定しようとした意図がうかがえる。

I郭より北側の曲輪、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ郭は地山を削って段差を作っており、北に向かうほど狭小で低い曲輪となっている。いずれも東・西端には切岸が見られる。曲輪間の連絡路は主として西側に配置されており、東側緩斜面からの侵入に備えた作りと解釈できる。

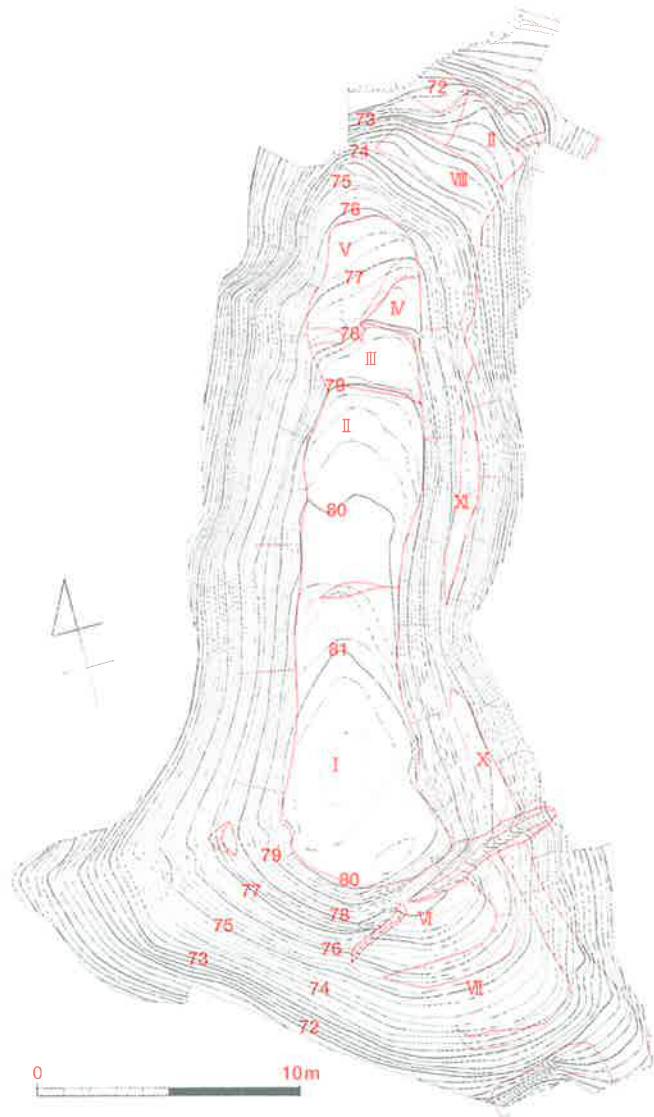
尾根上曲輪群からややレベルが低い調査区北端にも平坦面が作られているが、その性格については不明である。

また、尾根上曲輪群東側の急斜面には、幅1m～2mの腰曲輪Ⅹ・Ⅺが作られている。尾根上曲輪群との高低差は約2mを測る。Ⅹからは鉛製の鉄砲弾1個が出土した。この鉄砲弾は球形で、直径2.3cm、重量63.4gを測る大型のものであった。ここで注目したいことは、腰曲輪Ⅹが掘切状遺構を埋めて

作られていたということである。腰曲輪Ⅹが作られた時点では掘切状遺構は埋め立てられており、Ⅹは改修工事によって作られたことが明確となったのである。

以上、E地点の概略について記したが、広い視野から眺めると、E地点の城は真山城（本城）、天狗山城（支城）から続く尾根上に築かれており、真山城の端城と考えることができる。防備面から解釈すると、当初は南からの敵に備えた築城であったが、改修により、東からの侵入にも重点を置いた城構えと変化させている。真山城は毛利氏と尼子氏の両氏が陣を構えており、E地点の城についても両氏が利用したと考えられるが、古文書が残されていないため、この城がどのような歴史をたどったかについては推測の域をでない。ただ改修工事によって腰曲輪が普請されているということは、戦法が鉄砲中心の戦へと移行したことをものがたる事実であり、その点にこの山城を解釈する大きなヒントが潜んでいるのではないかと思われる。

（江川 幸子）



(6) F地点

F地点は山城または山城関連遺跡推定地として1500㎡について調査を実施した。

調査区の南東隅には現在でも南の谷から上がってくる道があるが、調査区に入ったとたん道は急傾斜になっている。そして下方から見ると右側には低い土塁状遺構があり、左側には平面コの字状に張り出した高まりが見られる。この左側の高まりは地山上に1.5m近く盛り土して作られたもので、横矢的性格をもつものと思われ、この一帯が虎口空間であったと考えられる。

また、調査区中央の西端にも、盛り土による横矢状遺構と土塁が見られ、虎口空間があったと考えられる。

虎口空間と考えられる遺構は、以上に記したように2カ所検出できたのだが、この調査区の中には曲輪らしい曲輪が無い。標高57.00mの最高所の東側に若干の加工段が見られるが、曲輪と呼称するには苦しい。最高所の西側には平坦に近い緩傾斜地が広がっているので、ここを何らかの軍事施設として利用していた可能性が考えられるが、この場所の性格については不明と言わざるを得ない。

～ 余談 ～ I地点を調査中に作業員が23本の松茸を見つけ、調査員にも1本が分配された。その貴重な1本は松茸ご飯となり、10人の舌を堪能させることができた。普段はスーパーで横目にしか見ることができない松茸が、松江市街地にほど近い丘陵でこれほどの数見つかるということは新鮮な驚きであり、この場所が近い将来失われることであろうことは個人的見解として非常に残念で仕方がないことである。
(江川 幸子)

(7) まとめ

北側の天狗山城は頂上部付近に曲輪があり、真山とは尾根伝い往来が可能であることから、この尾根筋は真山城塞群の一部であり、陣城の一部ではないかと考えられる。そのため真山城と機能した時期が重なるのではないだろうか。

これらの城跡は尾根全体にわたって縄張りが構成されているが、十分に加工がなされていないところも多く、中途半端な感じがする。しかし文献にも登場しない戦国期の貴重な城跡の一つではないかと思われる。
(石川 崇)

出雲地方（松江周辺）の略年表			国内事項	
1563年	永禄6年	白鹿城陥落、毛利氏はこの地域の拠点として真山城に多賀元信を入れる。	桶狭間の戦い	(1560年)
1566年	永禄9年	月山富田城陥落。		
1569年	永禄12年	尼子勝久・山中鹿之助、出雲に進出し拠点として真山城を占拠。	信長、入京	(1568年)
1570年	元亀元年	布部山の合戦、尼子再興軍敗北。		
1571年	元亀2年	勝久・鹿之助、真山城から退去し出雲地方から撤退。 ※これ以後、織田氏を頼って因幡・丹波を転戦。	室町幕府滅亡	(1573年)
1578年	天正6年	上月城落城、勝久自害、鹿之助護送中に殺害される。	本能寺の変	(1582年)
1600年	慶長5年	関ヶ原の戦い、毛利氏は防長2カ国に削封される。代わって堀尾吉春が出雲に入国する。	秀吉、全国統一 家康、江戸に幕府を開く	(1590年) (1603年)

米坂古墳群

米坂古墳群は松江市西尾町に所在する。

米坂古墳群発掘調査は、農道建設にともなう緊急発掘調査で平成8年度から調査を開始しており、本年度も引き続き210m²について調査を実施した。本年度の成果としては、新たに4基の古墳を確認し、調査区全体としては古墳12基、墳丘を伴わない埋葬施設8基について調査を終了した。

2年間にわたる調査の結果、米坂古墳群はすべて小規模な方墳で、古墳時代中期後半から後期半ばの短期間に、墳裾を接するように極めて高密度に築かれた古墳群であることがわかった。具体的に記すと、1・2・9号墳が中期後半、5・11号墳が後期前半、3号墳が後期半ばである。ちなみに、その築造時期は、古墳群の100m東に位置する住居跡、米坂遺跡が営まれた時期とほぼ符号していて興味深い。

米坂古墳群の大きな特徴としては、主体部が方墳の辺に対して対角線方向に作られているタイプが4基についてみられるということである。それは3・5・9・11号墳で、時期的には後期初頭から半ばである。

また、古墳の築造時期が中期後半から後期半ばの間に限られていることも上げられる。後期後半に小規模古墳が飛躍的に増大する時期にはこの場所には古墳は造られていないのである。後期後半以降

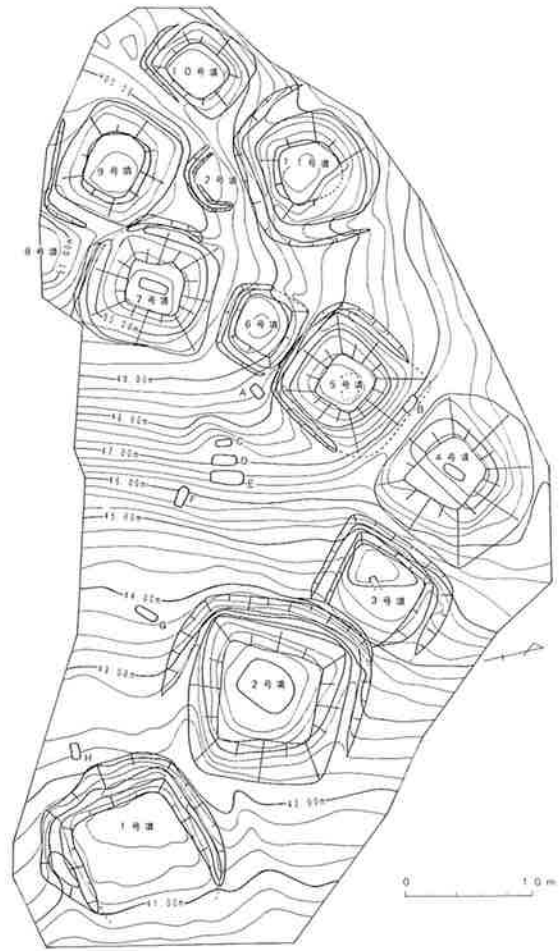


第11号墳全景（主体部が方墳の辺の対角線方向に作られている）

の古墳は西尾町の東隣の朝酌町に多数分布が見られることから、この地域の中心が後期後半になって朝酌町に移行したことが考えられる。それは、後期後半から大井・朝酌町周辺において須恵器生産が飛躍的に増大したこと、律令時代を目前にして矢田の渡しを中心とする官の道が整備され始めたことと無関係ではないだろう。(江川 幸子)



11号墳出土須恵器



米坂古墳群調査成果図

柴尾遺跡

柴尾遺跡は松江市西尾町に所在する。米坂古墳群から直線距離にして約400m西の地点である。そこは和久羅山から派生する丘陵の先端部に近い狭い谷で、常に豊富な湧き水が流れている。

遺物散布地として調査を受託していたため、1000㎡について全面発掘調査を実施する予定であったが、まず重機で3本トレンチを掘ってみたところ、いずれも上から客土層、旧耕作土層、深い沼地状の自然堆積土層が観察できたのみで、遺構・遺物は全く検出できなかった。

そこで、島根県教育庁文化財係、松江市文化財室と協議した結果、地形やトレンチの土層堆積状況から判断して遺構が存在する可能性は無く、流れ込みの遺物も出土しなかったため、全面調査は実施せず、トレンチ調査のみで調査を打ち切った。

ちなみに、分布調査で表採された土器片は、柴尾遺跡(?)に隣接している圃場整備された水田から表採されたもので、それらは圃場整備工事の際に客土した土の中に混じていたものと推察される。

(江川 幸子)

松江北東部遺跡（荒船遺跡）

島根県松江農林振興センターでは、本庄平野の水田地61.4 haを対象として、昭和62年度から10年計画で圃場整備事業を実施しているが、本庄平野一帯が本庄川流域条里制遺跡として周知されていたため、松江市教育委員会では工事の進捗状況に合わせて昭和61年度から継続して発掘調査を実施している。

平成9年度は、上本庄町字荒船の12工区について5月6日から7月31日まで10×2 mを基本とするトレンチを9本設定して現地調査を実施した。本工区は周知の遺跡である本庄川流域条里制遺跡の隣接地として何らかの遺跡の存在する可能性が高いことから、調査地内の遺跡及び遺構の有無の可能性、遺物の性格、時期等を明らかにすることを目的とした。

調査の結果、調査区西側に位置する周囲より一段高い水田地に設定した“T-9”で、掘立柱建物跡が2棟、井戸状遺構が1基、土壙状遺構が1基、検出された。

掘立柱建物跡は、柱間寸法を南北で2.0m～2.2m、東西で1.6m～1.7m程計る2×2間の建物跡が1棟、柱間寸法を東西で1.9m～2.3m、南北で1.7m程計る2×1間の東西棟の建物跡が1棟、計2棟が検出された。これらの建物跡の柱穴の覆土中から遺物が数片出土したが、そのうち10世紀前半頃と思われる坏底部片がこの建物跡の最下限の時期を示すものと考えられる。

井戸状遺構が1基検出されたが、これは楕円形の平面形を呈し径1.6m×1.8m、深さ1.3m以上を計るものであった。検出面より約20 cm下までは非常に堅い暗茶褐色土が入り込んでおり、その下層には





調査区配置図



有舌尖頭器



中世土師器
(井戸状遺構)

11世紀代と思われる高台付きの坏を含む灰褐色土がかなりの厚さで堆積し、検出面より約1.0m下では大小の礫が確認されると共に湧水が激しくなりこれより下には掘り下げられず、床面は検出できなかった。また土壙状遺構が1基検出されたが、これは円形の平面径を呈し径1.3m×1.2m、深さ0.3mを計るものであった。この土壙内からは礫及び遺物が出土したが、そのうち最下限の時期を示す遺物は10世紀前半頃と思われる坏底部片が認められた。この他に柱穴と思われるピットが十数穴検出された。

包含層から出土した遺物については、調査地内の東側の谷と谷状地形の入り口のトレンチから、縄文時代～中世頃の遺物が出土したが、その中でも注目すべきものは、まず縄文時代草創期と思われる安山岩質の有舌尖頭器が出土したことである。この出土例は本遺跡が県下10例目に当たるが、当該時期のものは安山岩質のものが主流でありこの有舌尖頭器もその例にもれなかった。

以上調査結果の概略を記したが、今回の調査で、この谷状地形では人々が約1万年前から何らかの生活していたことが分かったので、今後この谷状地形を囲む丘陵上の遺跡の分布状況を検討していけば、より詳しい本地域の歴史が解明されるであろう。(昌子 寛光)

田和山遺跡群

田和山遺跡群は松江市街地南方の乃白町にはしる国道9号線バイパス沿いの小高い丘陵地に位置する遺跡である。近隣の遺跡としては、本丘陵地内南方に前方後円墳の田和山1号墳、本丘陵の北東に派生する丘陵に四隅突出型墳丘墓や多数の土壙墓が見つかった友田遺跡群の存在が知られている。

本年度の調査は3重の壕が廻る環壕遺跡、環壕遺跡の中に造られている7号墳、玉作工房跡が確認されたA遺跡、柱穴が検出されたB遺跡、竪穴式住居2棟が確認されたC遺跡について行った。

これら遺跡のうち環壕遺跡、7号墳、A遺跡、C遺跡についての概略を以下のとおり記すことにする。

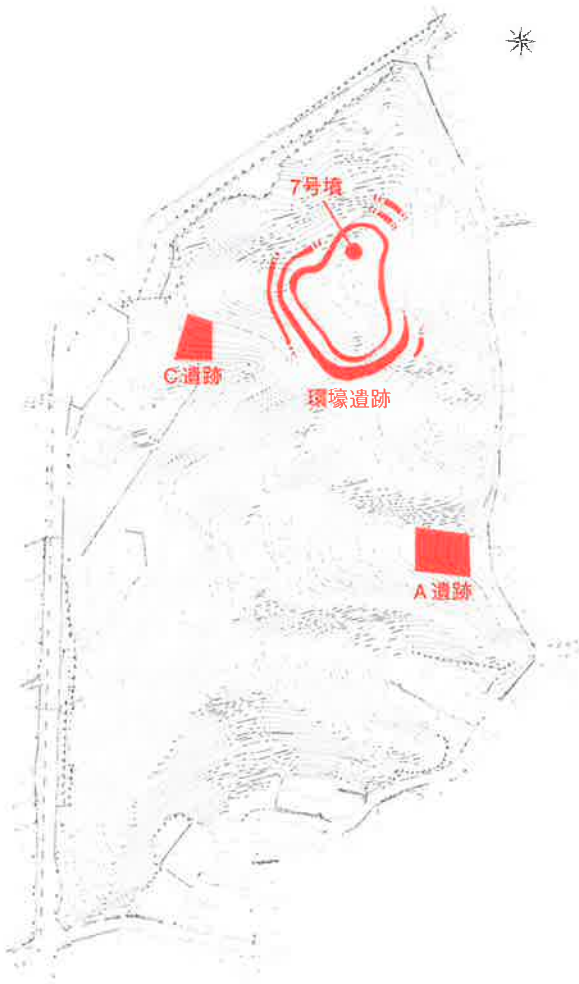
環壕遺跡

本遺跡は、標高46mの独立丘陵に3重の環壕をはちまき状に廻らすものである。調査の便宜上、3重の環壕が検出された所を環壕部、環壕を廻らす中心となる独立丘陵頂部一帯を山頂部と呼称することにした。また、各環壕の名称については山頂部側より第1環壕、第2環壕、第3環壕と呼称した。

(環壕部)

本調査区では弥生時代の環壕が3本検出されている。このうち第1環壕、第2環壕は山頂部をほぼ一周する形で検出されており(第2環壕は東側で一部消滅)、総距離は第1環壕、第2環壕共に約200mを測るものである。なお、第3環壕の総距離については本年度の調査段階では確認できていない。それぞれの環壕の断面形は、第1環壕は逆台形状、第2、第3環壕は基本的にV字状に掘られている。また、第1環壕では一部の場所で環壕の掘り直された跡が確認されている。この第1環壕の新旧環壕の時期差などは来年度に継続して調査する予定である。

遺物は、第1環壕内を主として弥生前期末～中期末の土器が数百点(中期が大半)、須恵器が数点、石鏃、石斧などの石器が数十点出土している。石鏃は、黒曜石製とサヌカイト製が出土しているがサヌカイト製が多い。7号墳北西部の第1環壕内では、荒神谷遺跡などで出土している中細形銅剣を模倣した有樋式磨製石剣が出土した。この形式の石剣の県内出土は現在まで二例しかなく、非常に重要な出土遺物であろうと思われる。



遺跡位置図 (1/4000)



環壕遺跡全景（南西より）



第1環壕（つぶて石が見える）

(山頂部)

東西約12m、南北約35mの範囲に約300穴の柱穴を検出しており、傾斜変換点辺りには柵列と思われる穴列を確認している。

北西側の山頂部最高所には、2間×2間の総柱建物跡が確認されている。この建物跡の北西側では、6穴の柱穴で形成される穴列も確認している。また、山頂部南側の傾斜変換点付近(柵列付近)では、1間×1間の中央に柱穴1穴を持つ物見櫓(望楼)のような建物が確認されている。その他、山頂部南端辺りで三日月状の加工段を検出している。この加工段では、火を使用した跡(焼土)も検出されている。遺物は弥生時代前期末~中期末の土器の他、石器や黒曜石の原石なども出土している。

以上述べたとおりこの山頂部では、2棟の建物の他には住居のようなものは見つかっておらず、この場所がどのような性格を持つものなのか、確証は得られていない。



銅剣形石剣



環状石斧



山頂部全景

7号墳

本遺跡は、環壕遺跡内の山頂部北東側の丘陵頂部に位置する。墓壙は、地山面から二段に掘り込まれており、最大長3.8m、最大幅2.1mを測るものである。墓壙内底面には、木棺埋葬後に詰められたと思われる橙色粘質土を検出しており、平面プランから長さ1.8m、最大幅0.4mの組合形木棺であったと考えられる。遺物は、墓壙中心辺りの表土中及び表土下第一層中にて古墳時代前期の二重口縁の直口壺片、鼓形器台片2点、高坏片2点が出土している。なお、墓壙内からは副葬品などは何も出土しなかった。

A遺跡

本遺跡は、田和山丘陵の東裾にいくつかある小さな谷地形のうちの一つに所在する。

調査の結果、南斜面の地山面から古墳時代中期のものと思われる玉作工房跡を1棟検出した。

6.6m×3.8m以上の竪穴建物で支柱穴は4本あり、周溝を巡らしている。建物床面の出土遺物は、古墳時代中期頃の土器数片、めのうの勾玉未製品、碧玉やめのうのチップ、ガラス玉などであり、工作用ピットの中から小形丸底壺、碧玉のチップ多数、円形ピットから甕等の土器、長方形ピットから滑石の白玉が出土している。

この谷では、表土から地山面まで堆積土のすべてが遺物包含層であり、南斜面からは古墳時代前期～後期の土師器、須恵器、内磨砥石、碧玉やめのうの管玉未製品、勾玉未製品、チップ等が、北側斜面からは、谷底部分でこれらに奈良、平安時代の須恵器や土師器、土師質土器、曲物などが加わって出土している。

C遺跡

本遺跡は、環壕遺跡から西に伸びる尾根の先端からさらに南に派生する支尾根の主に東斜面に位置する。

検出した遺構は、3重の環壕遺跡と同時期に営まれた弥生時代中期の建物跡、古墳時代後期の建物跡、ピットを伴う加工段などがあり、出土した遺物は弥生中期～古墳時代後期頃の土器、石鏃、石包丁、石斧などの石器などコンテナ13箱分であった。

弥生中期の建物跡は、床面の直径が約8mの円形竪穴と推定されるが、当初の上端と南側床面は古墳時代後期に削平されたものとみられる。

古墳時代後期の建物跡は、尾根筋の西側斜面に掘り込まれた一辺5.2mの方形竪穴であるが、西辺は流失したものとみられる。床面のピットは、16穴あるが浅いものが多く配置も不整で支柱穴がはっきりわからなかった。焼土は、床面中央より西寄りで見出した。周溝は、北、東、南の三辺にみられる。また、加工段4ヶ所からは須恵器片が出土しており、一応古墳時代以降のものと現段階では考えている。

(落合 昭久)